

本共同研究は2015年10月に始まり、第1回目の研究会を開催したばかりで、今は共同研究の成果を報告できる状況にはない。そのため、プロジェクトリーダーとして、この共同研究の背景と期待される成果について述べたい。

本共同研究の目的は、考古学的知識の形成、利用に関わる多様な実践を明らかにしようとする事である。それによって、考古学はどのように人々の行動や認識に影響を与えているのか、また、どのように新たな社会組織や社会関係の形成を促し、我々を取り巻く世界を変えているのか、これらについてより深く理解することを目指している。

人類学的に見た考古学

考古学は一般的には、過去の人間の活動について人間が残したモノなどを通して理解しようとする学問だと考えられている。そして、考古学者は、古くは石器時代から最近の工業化社会に至るまでの過去について、客観的なデータをもとに、「イデオロギーとは無関係に」記述する。

しかし同時に、考古学は現在の政治・経済的、倫理的、イデオロギー的対立に巻き込まれていることも明らかである。たとえば、発掘された文化財や景観は誰が所有すべきか、博物館はどのようにして過去の文化やエスニック・グループを展示すべきか、考古学は国家主義的なプロジェクトやマイノリティの抑圧に加担してはいないだろうか、考古学的調査や遺跡の保存は（宅地開発などの）公共的ニーズよりも優先すべきことなのだろうか。これらは、考古学者が対処しなければならない問題の一例である。

また視点を変えれば、考古学は、過去についての学問であるだけでなく、我々が住む現代の世界をも創り上げる実践である。発掘調査によって長く失われてきたモノを掘り出し、それらを保管するために博物館を建設し、そこは現在の文化的景観の一部となる。重要な遺跡は史跡公園となり、復元住居が建てられ、公園を訪れた人々は自らの過去を体験し、学ぶことができる。

このように、考古学が、どのような社会的影響を受け、また、どのように現代社会を形作っているのかということにまで視野を広げれば、そこに、文化人類学（民族誌的調査）が明らかにすべき多くの課題が見えてくる。

考古学的知識を形成する人々の多様性

考古学者に対する根強いイメージに、「英雄としての考古学者」というものがある。これは19世紀、文明化された西欧から、危険を伴いながら植民地へ旅し、考古学的遺産を「救い出し」、過去を再構築した考古学者のことを指す（Shanks and Tilley 1992: 89）。このイメージは、ハリウッド映画「インディ・ジョーンズ」で有名である。

こうしたイメージとは対照的に、実際の考古学の実践は、1人でできるものではない。「英雄としての考古学者」は、遺跡の発見という手柄が評価され称賛されるが、実際に地面を発掘する地元の人々の貢献は無視される。しかし、（1人の考古学者に結びつけられる遺跡もあるが）現場で発掘を行い、研究室で遺物を分類し、さまざまな分析を行い、報告書の出版のために土器の図面を作る過程には、多くの個人や専門家が関わっている。

さらに、考古学者は、遺跡に関わるさまざまな関係者との交渉と協力を必要とする。発掘を行うには、資金の調達、地主や地元政府との交渉や相談も欠かせない。考古学者は他分野の専門家も交えたチームを結成し、作業員を雇い、発掘のための資材を提供してくれる人々との交渉も行う。遺跡が注目を集めれば、考古学者は現地での説明会を開催し、遺跡保存や復元事業のための委員会に参加することになる。

このような考古学的知識の形成に関与する人々の多様性については、すでにいくつかの分野で研究されてきている。たとえば、パブリック・アーケオロジーは考古学に関わる個人（ステークホルダーと言う）に焦点を当てる分野の1つで、その目的は、協働的で倫理的な責務を担った考古学的研究プロジェクトを作ることにある（Matsuda and Okamura 2011）。

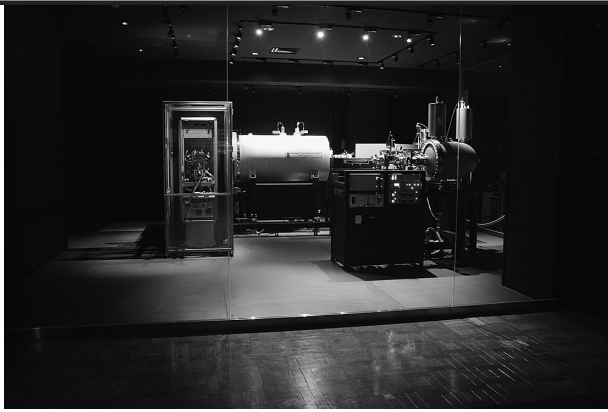
本共同研究は、「パブリック・アーケオロジー」の倫理面への関心を共有しながらも、考古学がどのように行われるべきか、についての直接的な提案を目指している訳ではない。むしろ、関係者の多様性に注目することによって、考古学と考古学が持つ個人や社会に対する広範な影響についての理解を深めることを目指している。

共同研究メンバーの多様性

考古学的実践に関わる人々の多様性を理解するために、共同研究の参加者はさまざまな専門分野、教育



ベトナム人研究者とベトナム人女性、日本人大学院生と学部生と一緒に発掘した土器を洗う（2014年8月、ベトナム・クアンナム省ズイスエン県、吉田泰幸撮影）。



科学分析のプロセスを見る展示のひとつ、東京大学総合研究博物館の加速器質量分析計（2015年4月、東京大学総合研究博物館、米田穰撮影）。



青森県三内丸山遺跡公園・縄文復元ロングハウスで行われた縄文お月見の宴（2014年9月、吉田泰幸撮影）。

的背景、研究領域、考古学への関わりを有する18人で構成されている。

メンバーには考古学者が多く、それ以外に文化人類学、博物館学、形質人類学、古植物学、文化遺産研究、文化研究を専門とするメンバーも含まれている。かれらは地方博物館、国立博物館、教育委員会、大学、自然科学のラボなど、さまざまなところで働き、調査研究を行っている。かれらのフィールドは日本だけでなく、南北アメリカ大陸、ヨーロッパ、中東、中央・東南アジア、オセアニアにまたがっている。

さらに、本共同研究では考古学の実践に関わる人々をゲストスピーカーとして招聘することも予定している。復元画に携わるアーティストや、考古学的発見を世に伝える新聞記者、復元建物に助言を行う建築史家、遺跡での祭りを主催するNPOのメンバー、といった人々を招聘する計画である。本共同研究をきっかけに、これら多様な参加者と共に、考古学に対するお互いの関心、見方や関わり方を学び合うことが可能な場を形成したいと考えている。

研究課題：考古学の学習と教育、データ生成、社会への影響

ここ10年の間で、考古学の民族誌（ethnography of archaeology）が重要な研究領域となりつつある。関連する論文集も何冊か出版され、多くは発掘調査中の遺跡における考古学者とステークホルダーの相互作用に着目している（Edgeworth ed.）2006）。こうした研究は日本ではまだ行われておらず、本共同研究は、先駆的、実験的な研究となるだろう。

本共同研究は、暫定的に次の3つの研究テーマを設定している。1つ目は、考古学的知識・技術習得のプロセスにおいて、考古学がどのように個人のものの見方やコミュニケーションの仕方、ふるまいに影響を与えるのかに着目する。大学の授業における考古学実習の場、研究室、発掘調査中の現場、あるいは、研究所や博物館のアウトリーチ活動の場が研究フィールドになる。教科書での考古学的知識の提示のされ方や、博物館のエスニック・グループの表象をめぐる対立などが分析の対象となるだろう。

2つ目は、考古学的データの生成に関する研究である。ここでは、野外での発掘調査活動やラボで、出土品などのモノが、どのように考古学的データに変換されるのかに着目する。たとえば、考古学的データが生み出される自然科学のラボ（加速器質量分析のラボなど）などでの参与観察が、科学的分析の「ブラック・ボックス」を開くことになる。これにより、データを生成するさまざまな科学的分析の可能性や限界につ

いて、理解することが可能になるだろう。

3つ目は、考古学が、遺跡観光、民族・国家史の修正、社会運動などにどのような影響を与えているのかについて着目する。ここでの問題意識は、考古学はどのように物理的景観を変えたり（あるいは破壊、創造するのか）、現代の社会関係やエスニック・文化的アイデンティティの概念を特徴づけるのかというものである。幅広いテーマが研究対象になってくるだろう。たとえば、まちづくりにおける考古学的発見の利用、戦争その他の紛争による考古学的遺跡の破壊、（多くの場合は違法な）文化財の取引、先史時代の建物復元をめぐる（オーセンティシティをめぐる）論争、考古学的知識が現代の社会運動に与える影響、などである。

おわりに

3年間の共同研究で、私たちは考古学的知識の形成に関する実践についての広範な理解を目指しながら、考古学に関わる多くのステークホルダーとの対話の構築も行いたいと考えている。

私たちが取り組む問題は、学習実践研究、モノは我々にとって何なのかという問いを含むオントロジーとマテリアリティの研究、博物館や観光研究に関心がある文化人類学者にとって有益なものになるだろう。考古学者にとっては、この共同研究が考古学的知識の形成に関する複雑な多様性について、さらなる理解をもたらすことになるだろう。そして、たとえば「文化資源学」などのような、領域横断的で応用科学的な研究の要請が高まりつつある中で、本共同研究は、そのような研究の潮流を形作るモデルケースの1つとなることができるのではないかと考えている。

【参考文献】

Edgeworth, Matt (ed.) 2006. *Ethnographies of Archaeological Practice: Cultural Encounters, Material Transformations*. Lanham: Altamira Press.
Matsuda, Akira and Katsuyuki Okamura (eds.) 2011. *New Perspectives in Global Public Archaeology*. New York: Springer.
Shanks, Michael and Christopher Tilley 1992. *Re-constructing Archaeology: Theory and Practice*. London: Routledge.

ジョン・アートル

金沢大学外国語教育研究センター・国際文化資源学センター准教授。専門は文化人類学。日本の考古学、多文化主義を中心にして研究を行っている。共著に *Multiculturalism in the New Japan: Crossing the Boundaries Within* (Nelson Graburn, John Ertl and Kenji Tierney (eds.), New York: Berghahn, 2008) など。